

三

枝

和

子

野

守

の

鏡

集英社

野

守

の

鏡



三

枝

和

子

集英社

野守の鏡

一九八〇年九月十日 第一刷発行

定 価 九八〇円

著 者 三枝和子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部二三〇―六三六一
販売部二三八―二七八一

印刷所 大文堂印刷株式会社
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1980 K. SAEUSA

Printed in Japan 0093-772271-3041

野守の鏡*目次

夾竹桃同窓会
7

九月高原
23

枯葉舗道
43

朝秋霜
61

初冬盜賊館
79

「野守」
97

雪原埋葬
113

あとがき					春雷高速道路
229	鯉船幻想	螢酒場	藤色階段	桜電車	131
	211	193	173	153	

装丁
坂野
豊

野
守
の
鏡

夾竹桃同窓会

遠くで、大鼓が打ち鳴らされているのか。空気を横ざまに破る響。続いて肺腑を絞る叫び。それから一際、強く高い皮の音。

私は、ふらふらと立ちあがる。何かに呼ばれているような気がする。何かを呼ぼうとしているような気もする。そのところが、はつきりしない。ただ、魂を奥深い場所から揺さぶるものがあって、それに促されて歩いている。

見渡す限り、何も無い。視野は真空の透明な空間で、私はいま、そのなかを漂うように歩いている。もちろん私自身の身体も見えない。歩いているという実感だけを抛りどころに歩いている。駅が現われる。そう、駅の正面玄関は、現われはする。しかし確かな形をとって見えているわけではない。そのものがそのものとして其処に存在しているかどうかはよく分らない。そんなふうにして市役所が現われる。市役所前の大通り。花時計。税関。展望台のあるホテル。現われて

来るものは何故か儼^{はかな}いたたずまいだ。

風が吹き始める。風は駅の正面玄関を吹き消す。それから南下して、市役所、税関、展望台のあるホテルの順に消していく。大通りの両側は瞬時に一望の焼野原と化す。

相変らず遠くで大鼓が打ち鳴らされている。いつのまにか、小鼓も混っている。そうやって切なく何かを呼んでいる。

「こういうときは、死んだひとが招いていると言うのよ。うちのお祖母^{ばあ}ちゃんから聞いた」

「……………」

私は頷く。

「陽が強いのに、何だか寒い感じね」

「……………」

私はまた頷く。喋っている相手の名を思い出そうとするのに、まるで浮かんで来ない。……長尾幸子、高田英子、門脇光子、長谷川喜代子……しかし、喋っている相手の周囲だけ、何かで塗り潰したように記憶が欠落している。

私は、名前の思い出せない相手と一緒に喫茶店に入る。

「紅茶がいいわ。私はミルク・ティ」

「同じでいい」

私は相手が訊ねない前に答える。名前の思い出せない相手は、にこっと笑う。

「この前のときもそうだったわね。やっぱり二人して紅茶を飲んだわ」

——この前のとき？

しかし私は黙って頷くだけで声には出さない。

「K市も変ったわ」

名前の分らない相手は、感慨深げに窓の外を眺めている。骨張った手の甲。節の大きい指にサファイアの指輪をはめている。顎のいかつい、意志的な表情だ。お互い五十歳になっているはずなのに、名前の分らない相手は少女のようにきらきら輝く目をしている。

「ねえ、何か聞こえない？」

「何が？」

「何だか、笛みたいな音……」

——私には、大鼓と小鼓が聞こえる。

しかし、この言葉も口には出さない。

「やっぱり、死んだひとが呼んでるみたい」

「私たちが死んだひとを呼び寄せてるんじゃない？」

「……………」

名前の分らない相手は、一瞬、驚いたように目を睜る。それから、「そうかも知れない。そうかも知れないわねえ」と早口に言う。落着かない様子で周囲を見廻す。

「時間大丈夫？」と念を押す。「ねえ、時間大丈夫？」

「……………」

私は、ふと気付く。そう言えば、このひとも一度も私の名を呼んでいない。ひょっとして、このひとも私の名が分らないのではないかしら。名前の分らない同士が紅茶を飲んで、これから揃って同窓会の会場へ行こうとしている。

「どうしたの。一人笑いして」

「……………」

しかし私は首を振って立ち上る。

「そろそろ出ましようか」

「時間なの？」

名前の分らない相手は、急に悲しそうな表情になる。

「もう行ってしまうの」

——行ってしまうの、って、誰が？

私は混乱する。このひとは何を考えているのか。

「一緒に行かないの、あなた」

「私？」

名前の分らない相手は、眉をしかめ、ゆっくりと首を振る。

「私は行けないわ」

「どうして？」

「……………」

しかし私は何だか彼女が決して私と一緒に行かないであろうことを始めから知っていたような気がして来る。私は別れを告げて一人で歩き出した。ゆっくりと山手通りへの坂道をのぼった。寺の境内では、大きな夾竹桃が一叢、燃え立つように真盛りだった。海は夾竹桃の向うにあった。花房の上に貼りついた鮮かな一枚の群青色。空は、さらにその上にあった。空には一片の雲もなく、太陽の周辺だけが白く輝いていた。

夾竹桃の赤い色。

そのときも私は歩いていた。しかし自分が何処を歩いているのか、はっきりしなかった。枕木を踏んでいたから、線路を歩いていることは間違いなかった。赤錆びたレールを小高く積上げた駅の構内を通り過ぎたときの、夾竹桃を覚えていた。真盛りの花は、ホームにも構内に設けられた駅員の詰所らしい粗末な建物の周囲にも、群がりかぶさって咲いていた。

夾竹桃の花に連なる夏の暑い午後。ふいに流れを停めてしまった時間。私は思い出そうとしていた。

何故線路を歩いていたのだろう。列車の走っていない荒涼とした風景。列車は決してやって来ない。目的地までが行手から消えている。しかしそれより他に道を知らないから、仕方なく、た

だ線路を歩いていたので。線路を歩いて、いったい私は何処へ帰ろうとしていたのか。

蟬が啼いていた。物音の死んでしまった午後。蟬は啼いていても、いや啼いているからこそ逆に、物音が死んでいたのかも知れなかった。

私は何かを聞こうとしていた。何を聞こうとしていたのか。切れ切れのラジオの雑音のようなものを追いかけていた。雑音の合い間から洩れて来る敗戦のニュース。

十時近くになっているのに、寺の境内には人影がなかった。

あれが夢だった、という確かな証拠はなかった。しかし夢でなかったという確かな証拠も何処にもない。目に浮かぶのは鮮かな色彩ばかりで何のために自分がそこにそうしているのかが分らなかった。

何処から呼びかけられているのか、誰から呼びかけられているのかも、よく分らなかった。ただ何から、しきりと促されているような気配があつて、その場に凝つと立ちつくしていた。

——安村親子さんの三十三回忌の法要を兼ねての同窓会を、来る八月十五日、午前十時から、K市放生寺で持ちたいと思います。

それから放生寺への簡単な地図、会費などを書込んだ葉書を受け取ったのは先月の半ばだ。

世話役の名前には記憶があつた。括弧のなかに記された旧姓と名前を結びつけると、明瞭な輪郭を伴って浮かび上って来る少女の面影があつた。

しかし、それにも拘らず、この同窓会の案内状は、私をひどく不安にさせた。

——安村規子は死んでいたのか。

安村規子は女学校の同級生だ。戦争中、航空機工場に学徒動員の最中、研磨機の砥石が割れて飛んだのが頭に当たった。どういう当り工合だったのか、視神経がやられて失明に近い状態になったと聞いた。入院中に敗戦で、その後のことは知らない。

——今年が三十三回忌というのは、敗戦の翌々年に死んだことになるのだろうか。

私は、ふと湧きあがって来た思いを押し潰した。自分が今日まで安村規子に対して無関心だったことをひどく咎められている、と感じた。安村規子からではない。むしろ同級生の誰彼からでもない。よくは分らないが、もっと底深い場所にある何かから……。例えば、安村規子が苦しんで自殺しても、誰もそんなこととは無関係に三十数年を生きて来てしまった、その生きて来たことと自体を咎められているような気持……。

安村規子とは、工場の寮で同じ部屋だった。昭和十九年七月二十五日。工場での入所式が済んだあと、部屋割が発表された。七人ずつで一つの班を構成し、一つの部屋に入るのだった。部屋での安村規子のことは、余り記憶に残っていない。朝七時半に部屋を出、帰りは六時という日課だったから、共に生活する時間が短かったせいもある。養成工期間の三週間が過ぎると、夫々の職場に配属された。私は別棟の検査課に廻されたので、グライNDERに配属された安村規子とは、工場で顔を合わせる機会がなかった。

戦時下の寮生活は辛かった。風呂は五日に一度しかなかったから、虱を湧かすものが出て来た。

みんなで協力して虱駆除に躍りとなった。しかし何よりも苦しかったのは食事だ。五時に終業、点呼を受け、寮に着くと五時半、そのまま食堂に入り高梁御飯と鯨肉の、それもほとんど入っていない肉じゃがなどを貪り食って部屋に帰る。

部屋で、夜、みんなと何を話しあったかはまるで覚えていない。職場のニュースなど、お互いに交換しあっただろうに、それらは何も彼も忘れてしまった。ただ、食物の話には熱中した。

「ああ、あ。今夜、また夢を見るわ」と言い出すものがある。

「おはぎを食べている夢なの。夢のなかでちゃんと食べているの」

「あら、羨ましい。私など、いつも食べようとしたら目が醒めてしまうの」

「だって、夢のなかなんぞで食べたって、しょうがない」

「そんなことないわよ。夢のなかでだって、とにかく食べられたら仕合わせよ」

「私ね、ところてんの夢見ちゃった。何故ところてんなんか見たんだろう。同じことなら、すぎ焼を見たかった。それに、あったかい白い御飯にオムレツ。白菜のお新香にお味噌汁……」

「ああ、止してよ。お腹が減っているのに唾が湧いて湧いて、胸が悪くなって来たわ」

それから不意の沈黙。消燈後の部屋のなかへ、ゆっくりと月の光が流れ入って来る。誰も寝つけない。七つ並んだ寢床の何処からか、細い溜息まじりの呟きが聞こえる。

「大根と油揚げを煮る匂いだわ。……お母さん……」

みんなが堪りかねて蒲団を被った気配。